

【コメント 1】

山川 曉 YAMAKAWA Aki

京都国立博物館

レスピシオ氏の発表は、西陣という日本の最高級織物産地の歴史的な変遷に始まり、聞き取り調査を通しての現状の分析、今後の展開に向けての提言が成されていた。染織史および服飾史という、いわば過去を研究する私は、現在のきものをめぐる産業の危機的な状況を見聞きしてはいても、現実の社会が内包する問題点を分析するには、あまりにも表層的な知識しか持ち合わせていない。しかし、ここでは敢えて、日本の伝統衣裳である「きもの」を研究するひとりとして、楽観的にすぎることは承知のうえで、きものの可能性について述べてみたい。

装いにかけられる金額は、常にいくばくかの目新しさへの対価であろう。素材であれ、色であれ、形であれ、流行とは昨年にはない新しい気分を取り入れることである。それゆえ、流行のないもの、あるいはその流れが極めて緩やかなものは、新たな消費を喚び起こしにくい。現在の洋服と和服の状況を少し考えてみれば、洋服の流行がいかにめまぐるしく、和服の流行がいかにゆっくりであるかが実感されるだろう。そのような中、きものの世界でありながら、年ごとに流行が生まれている分野がある。夏の浴衣である。最も外見に投資すると言われる二十代から三十代の女性が愛読するファッション雑誌には、お祭や花火大会にふさわしい装いとして、浴衣が提案されている。百貨店の売場面積を観察するかぎりでは、その市場は成長傾向にあるようだ。

きものの産業が伸び悩むなかで、浴衣が支持されているのはなぜだろうか。まずは、何をおいても、値段設定が手頃だからだろう。とはいっても、帯・下着・下駄などを含めれば数万円はするが、ブランド商品を買い慣れている購買層にとっては、この程度の値段で「きものを着る」という特別感が得られるのであれば、高い買い物ではない。次に思い浮かぶのが、帯結びが簡単な半幅帯なので、ちょっと練習すれば、友達同士あるいはひとりで着付けができる点である。とかく着用の面倒くさが障害になるきものだが、浴衣ならばそれほどでもない。さらに、仕立て上がりで売られているうえ、帯や下駄といった小物も豊富に揃うので、洋服感覚でコーディネイトできる点も見逃せない。反物の状態では仕上がりが想像しにくいし、そもそも、きものに一般的なオーダーメイドは、洋服の世界ではいまやまずお目にかかるない。

このほかにも、洋服のデザイナーの起用など、浴衣人気の要因は別に挙げられるが、従来のきものにはない、現代の消費者を意識した戦略が、最大の成功理由と私は考える。成人式の振袖は両親からのお仕着せが多いなか、夏の浴衣は自分たちで選んでいる点に注意しなければならない。それゆえ、去年とは違う新しい浴衣が目にとまり、流行をともなう市場が形成されるのである。

浴衣によって、きものを着ることに親しみを覚え始めたおしゃれな消費者たちは、その後どのようにきものと関わっていくのだろうか。そのひとつのあり方を、近年のアンティークもの、いわゆる古着市場の活況に見ることができる。京都の街なかに、まるで洋服のブティックのようなたたずまいで、古着のきものを並べるお店が増えたことに気づいた方も多いだろう。こういった古着は、これまで主に、外国からの観光客が求めるお土産用として雑然と売られていたものだが、新手のお店では、丁寧に畳まれたきものや帯が整然と並び、半襟や帯締めのような和装小物が、まるでスカーフやアクセサリーのように、美しく陳列されている。店員も個性的に古着を着こなした若い女性で、必要とあらばコーディネイトの相談にものってくれる。しかも、古着であるから、多くは一万円以内と本当に手頃だし、商品の多くは丁寧な手仕事による一点ものである。

このように、少しずつ増えているきもの好きで目の肥えた若い消費者に、古着ではなく新作を手にとってもらうにはどうすればいいのか。簡単に答えが出る問い合わせではないが、真剣に考え続ける必要があるだろう。きものの消費者には初心者と中・上級者がある。初心者はセンスのいい量産品からきものを着る楽しさを知るだろうし、中・上級者は値段が少々高くてほかにはない本物を求めるだろう。だが、安くて上等な古着を知る中・上級者にとって、新作のきものはあまりにも高額ではないだろうか。かねてから指摘されるように、原価を押し上げる複雑なきものの流通過程には、見直しが必要である。新作が売れなければ、産業を支える職人が育たず、ものづくりの伝統が消えてしまう。さらに、きものの着付けも、時と場によってもっと自由に選べばいい。おはしょりをしてお太鼓を結ぶ現在の基本的な着装法とて、明治時代以降に広まった着付けである。浴衣のような半幅帯や付け帯といった楽な帯結びを、街のおしゃれ着として広めるという戦略もあるのではないか。時代が移りゆくなか、それに応じて変化し、連綿と続いていくしなやかさこそが、伝統をつなぐ力になると私は考えたい。